

松下幸之助記念財団 研究助成

研究報告

【氏名】 鎌田由美子

【所属】(助成決定時) ニューヨーク大学美術研究所博士課程

【研究題目】

山鉾の華: 近世インド絨毯の生産、流通、受容—イギリス、オランダ、日本の場合を中心に

【研究の目的】

京都祇園祭の懸装品のなかには「京都グループ」とよばれる特異なタイプのインド絨毯が含まれている。近年、それらがデカン(南インド)産ではないかと指摘されたが、十分な研究がなされていない。このタイプの絨毯は以下の点で重要である。①懸装品の購入文書などから、絨毯の制作年代の下限がわかり、イスラーム美術史の重要な一分野である絨緞史の編年に貴重な手掛かりを与えることができる。②このタイプの絨毯がインドのどこで生産され、どのような物流によって世界各地に運ばれ、日本にもたらされたのかを明らかにすることで、当時の国際交易の様子を具体的に明らかにできる。③このタイプのインド絨毯が日本でどのように受容されたかを明らかにすることで、東洋におけるイスラーム美術品の受容の一例を明らかにできる。本研究の目的は、このタイプのインド絨毯の生産、流通、受容の様子を明らかにすることである。

【研究の内容・方法】

1 章

インドのムスリム王朝のもとで書かれた史書における絨毯の記述、そうした王朝で制作された絵画資料における絨毯の描写、イギリスとオランダの東インド会社の貿易記録、京都の山鉾町に伝わるインド絨毯の購入文書、イギリス植民地時代のインドで行われたインド絨毯の調査報告書などから、これまであまり研究されなかった南インド(デカン)も含めた包括的なインド絨毯生産の歴史を明らかにした。

2 章

「京都グループ」と称されるタイプのインド絨毯が、どこで制作され、どのような特徴をもち、どこに現存するかを明らかにした。織の構造、材質、モチーフに注目して調査を進め、ポルトガル、イギリス、オーストリア、日本、アメリカなどに、類似の絨毯が約 200 枚あることがわかり、デザインごとに分類して特徴を明らかにした。実際に調査した約 80 枚については織の構造、材質などの基本データをカタログにまとめた。

3章

ペルシア絨毯、北インドの絨毯、デカン絨毯がどのようにして世界各地に運ばれたのか、それぞれの需要に差があったのかどうかを、ヨーロッパ人の旅行記、イギリスとオランダの東インド会社の貿易記録・報告書などから明らかにした。東インド会社による絨毯貿易のみならず、私貿易商人による活動にも注意を払った。

4章

日蘭貿易関連の資料や、オランダ商館長日記から、日本にインド絨毯がどのようにもたらされたか(正規の輸入品・私貿易品・密輸品・贈物・注文品など)、時代ごとに分析した。

5章

まず、絨毯がイスラーム圏で持つ機能・意味合いを明らかにしたうえで、絨毯が制作された場所(イスラーム圏)から、文化的・地理的に離れた場所にもたらされたときに、その機能・重要性にどのような変化が生じるか、西洋の場合と日本の場合に分けて分析した。当時の祇園祭のガイドブックなどから、当時の人びとがインド絨毯をどのように捉えていたか考察した。

【結論・考察】

結論・考察

これまで特異な絨毯とされてきた「京都グループ」は 17 世紀後半以降にデカン地方で制作された貿易品であり、東インド会社や、私貿易商人によって世界各地に運ばれた。デカン絨毯の生産地は、ヨーロッパ人が綿織物輸出のため商館を置いていたコロマンデルコーストに近く、輸出するのに好都合であった。そのため、ペルシア絨毯や北インドの絨毯以上に広く流通した。オランダ東インド会社は、将軍などの支配者にペルシア絨毯を贈る一方、デカン絨毯は、主に私貿易品、役人への贈物、または注文品としてもたらされたようである。18 世紀にはそれらが転売されて市場に出回ったらしく、京都の豪商が手にして 18 世紀半ばには山鉾を飾ったと考えられる。当時の人びとの多くは、そうしたデカン絨毯を「阿蘭陀物」ととらえており、インド産との認識はなかったようである。もともと日用品・貿易品として生産されたデカン絨毯は、羊がおらず、絨毯生産の伝統のない日本では貴重な舶来品として喜ばれた。絨毯は各地の社会的・文化的な背景のうえに、それぞれの地で異なる機能をもって受容された。日本向きのインド絨毯には日本人の好みも反映されており、当時の国際交易・物流に密接に結びついていたことが分かる。